

協の松任市支部事務局長を引き受けていただき、現在は、石川県支部の事務局長として、慰霊碑の建立事業その他に多大のご尽力を頂いて、感激している次第である。

(石川県 永井 正三)

シベリア一六四〇日の重労働

島根県 星野 好夫

出生から入隊まで

私は、大正五年三月十三日、木次町の小作農家の八人兄弟(男六人・女二人)の六男坊として生まれ、高小卒を経て昭和五年四月より故郷の製紙会社に勤めることになった。

当時十五歳であった私は、なんとかして一人立ちするため、若干の勉強をしており、二年が過ぎた。家族は父母、兄、兄嫁、甥一人の六人家族で、中下位の生活であったと思う。

会社勤めの折、次のようなことがあり、これが将来シベリア生活に大きく役立つことを見聞した。

と申すのは、製紙会社は紙を乾かすボイラーがあり、このボイラーには常に高温の蒸気を二十四時間送ることとなっている。そのためボイラー手は常に罐の温度計を見ながら石炭を投入する。その投入方法により温度に高低が生ずる。石炭は薄く広く扇のように平均して投入せねば火力が上がらないことを知った。これがシベリアで役に立とうとは思ってもよらない出会いとなった。

昭和七年六月、私は郵便局に就職をするため広島逓信講習所に入所し、一年間主としてモールス符号を習得、八年七月から木次郵便局の受信係(夜九時三十分からは電話交換を兼務)として朝八時から二十四時間勤務となった。入隊するまで、昭和十二年二月いっぱい勤めた。

昭和十一年徴集である私は甲種合格であり、昭和十二年三月新京電信第三連隊に直接入隊、初年兵を終わる二年兵となるや早々、関東軍憲兵教習隊に入隊、訓

練を了え、短期間であったが昭和十三年九月、
齊齊哈爾憲兵隊に配属された。

終戦前満州の様相

関東軍は当時、関特演（関東特別演習）と称して南方移動を始め、現地人の徴集、開拓団の武装化を始めた。そのころになると満人の動向が一変し、今まで好意的な態度から一変して敬遠、離反的な態度に変わりつつあった。

例えば、夜間市内巡回等においても、店は閉鎖し内部で数人の者が会合していたり、見張りを玄関に配置していたり、こちらの様子を窺っているようであった。終戦間際になると、爆竹を各所で鳴らし、お互いに何らかの連絡をとっている様子が窺われ、また、赤旗を各所門前に掲げるなど不気味な街の様相であった。これらはすべてソ連に対する敬意を表しているものである。

当時ソ連の情報、諜報はすさまじいものがあって、これに対する防諜も怠ってはおられなかった。

我々も任務の都合上、満人の気心の知れた者との親

交、交流者もあったが、終戦間近になると姿を消す者行き先不明になる者もあった。これは彼らの護身策で、一面かわいそうでもあった。

私たちは任務の都合上、私服（満服、協和服）を装い巡回したものがだったが、詔勅（八月十五日）の前夜辺りは身辺の危険もあって外出できなかったし、ものすごい爆竹の連続であったことを記憶している。

終戦（武装解除）から入ソまで

ソ連軍の侵攻は八月九日ごろから国境地帯及び飛行機で開始され、齊齊哈爾には八月十五日夜到着したらしい。黒河方面か、海拉爾方面かあるいは飛行機を利用したのか判然としない。十六日の十時ごろ十名余のソ連兵が憲兵隊本部に姿を現し隊長と交渉の末、昼ごろ本部の広場に整列を命ぜられ、武器（拳銃、帯刀）は各人の前方に陳列した。程なくソ連兵により没収され、いわゆる武装解除されたのである。装具と身回り品は携行が許された。解除後、将校は本部と分隊の留置場に、下士官、兵は倉庫に集結させられた。当時本部分隊の将校は五名、下士官、兵は六十名くらいであつ

た。倉庫は終戦前は本部の酒保であったが、品物は片方に整理させられ、後々ソ連軍により外部に持ち出された。

監視兵は日本に帰るまでここにいろようと指示していた。これがいわゆる抑留第一歩で、食事は飯盒によるおつゆと食パン若干、他には何も与えられない。酒保にあったあの品物くらいは食べさせてもよいのではと思ったものだ。どうなることか判然としないといながら、遠からず帰れることを信じて物に耐えねばならぬ情けない日々が続いていった。

二日目夜、将校の留置場方面で銃声がして、だれもがただごとでないと事の真相を知りたかったが、ソ連兵の監視下では致し方なかった。翌日、あの銃声は拳銃による隊長の自殺であったことが分かり、心のやり場を失ったものだった。

隊長も一挺の拳銃を秘蔵し、覚悟を決めておられたものと思われる。終戦直後は各所で将校の自殺もあったと聞いている。

その後将校の動静はわからないが、我々は程なく齊

齊哈爾駅頭での使役（労働）にかり出され、荷物の積載等労働に服させられた。職務が職務だけに、取調べその他何らかの仕置きがあることを覚悟していたが、案外おとなしい日々が続いたが、取調べもあった。食事だけは極端に悪く、腹のすくこと夥しい。外部との接触もなく腹がすくににつれ郷里の食物の話、望郷心、肉親愛など、現職当時の元氣もなく、哀れな人間とも思われてきた。そのころまだ抑留などは遠い話であり、世の静まりを待って帰国できることを信じていたが、抑留へのイメージも濃くなり、抑留の話も出始め、陰うつな日々であった。

齊齊哈爾駅への往復の都度、邦人や婦人のあわれな姿を見たり、幼児の泣き叫ぶ声を耳にすることもあり、敗戦の実態をいやというほど見せつけられた。

齊齊哈爾は哈爾濱以西の軍の重要地点で、黒河、海拉爾、滿洲里を統轄する司令部があって、兵隊、貨物の輸送は物凄いのがあった。

入ソの状況

十一月初旬、東京ダモイを口実に齊齊哈爾駅に連行

され、他の輸送部隊に混入され有蓋貨車に押し込まれた。貨車は三〇トン貨車で、二段式で片隅に便所用の穴があり、トタンが挿入されていた。列車は昼間の移動を避け、夜間動き出した。車内は勿論真っ暗である。

そのころは、まだダモイを信じて車内も和気あいあいであったが、夜が明けるに従い、列車は西方に移動していることが分かった。ただごとではない。だれかれと討論が始まり、結論として、南方は列車その他が混雑しているので我々は満洲里經由シベリア鉄道を利用、ウラジオストクから帰郷とのことだったが、収まらない数日であった。列車が止まることに便所とともに辺りを見回し様子を窺う者も多く、いよいよ不安はつのるばかりであった。と言っても致し方なく自然のなりゆきに任せる外に道はなかった。

そのうちに腹はへるし、ソ連からの支給は薄く、身体は衰える一方であった。満洲里を過ぎても列車はなお西方に走っている。ここまで来ると一行の中には諦める者もあって、「これは抑留で重労働だ」と言う者もあり、車内もざわめいてきた。

乗車して十日くらいたった朝、チタ付近と思われる地点に列車は止まり、我々憲兵のみ下車を命ぜられ、ソ連監視兵三名と積雪三十センチの原野を北方に歩くこと十時間、ふと倉庫のような小屋のある付近に到着した。これが宿舎であり、当分我々の寝床であった。

重労働の始まり

この小屋は、後で分かったが、ソ連がソ独戦の際捕虜となった者（囚人）の宿舎に当てていたもので、最近まで入居していたようだ。

入口は二重になっており、最初のドアを開けると一メートルくらいの広場があり、更にドアがあつて階段があり、十メートルくらいの奥行となり通路があり、両方に丸太を半分にしたもの敷いてある。内部は真っ暗で、掘った小屋に等しい。ある程度の高さに土を盛り雨をしのぎ、屋根の代用となっている。明かりはないが松ヤニを焚くのだとのこと。程なくだれの顔も黒くなり目だけがすどく光っていた。水は近くに穴が掘ってあり洗面などは可能であったが、食事は極悪で僅少のパンとスूपのみのあわれな状態だった。

翌日からの作業は伐採である。二人一組で鋸二挺と斧二挺、鋸は、長さ一メートル、幅十センチ、二人挽きで、弓型となつて、二人で交互に挽くようになっていた。

原木は五十年以上経つた二抱え以上あるような大木で、高さは三十メートルくらいある松材であつた。先程の鋸を横にして二人で根倒しをするのだが、生まれて初めての伐採、とりわけて二人挽きの鋸である。交互に押したり引いたりするのだが、呼吸が合わず、鋸が遊んでなかなか幹に吸い込まない。おまけに空腹と寒さで意のごとく作業が進まない。その上監視兵に「ダワイ、ダワイ」と叱られながらの作業は、当人でなければ知る由もなく情けない限りであつた。根倒しされた大木は枝を落とし幹のみ二メートルごとに刻まれる。使用目的は都市の薪になるようだった。そのように小刻みにされた二メートル物は高さ二メートルに積みまれ、いわゆる二メートル四方の堆積ができる。こうして積みまれた二メートル物はソ連のトラックが来る地点までシベリア特有の馬により轎に積み込み運搬さ

れるのだった。

1 ノルマの始まり

チタ付近はバイカル湖があるため、湿地帯で、冬期のみ入山可能で伐採も冬期の六カ月のみである。最初一週間くらいはノルマがなかったが、作業に慣れるにつれノルマが与えられるようになった。ノルマは先ほどの二メートル四方の積材を二個が百％である（二人で）。たやすくできるものでもなく、泣かされる毎日であつた。

二メートル四方を真面目にやっていたら体がもたない。ずるいことは知りながら倒木した丸太の枝落としを高目に落とし（枝が幸いして堆積空間ができる）、外部から分かりにくい中程にその木を積みこみ周囲のみ普通状態にしておいた。

当分はこのことも通用したが、程なく彼らの知るところとなり、ひどく叱られたこともあつた。

入ソ以来、人間らしい食事にありつかないため、体の不調を訴える者も続出するようになり、寝ても覚めても食のことにのみ話が出るようになった。

当時、抑留者の四つの条件

- 1、飢え
- 2、寒さ
- 3、重労働
- 4、帰国

であったが、このうち、特に飢えについては最大の関心があり、中でも「ボタ餅」の話は当時の流行語でもあったと思われる。

朝、母の手伝いをしながら小豆のボタ餅を食べたこと、蒸された餅米をきねでこね、黄粉をまぶして仏様に供え、後は家族で試食したこと、正月雑煮餅を○個食べたことなど、童心に返って語る仲間であり、話だけで腹を満たそうとするアイデアでもあるのではなかっただろうか。

2 入浴

作業も零下三〇度以上になると中止とか聞いていたが、中止などもなく毎日が作業であった。ただ一カ月一回くらい入浴日があって歩いて施設のあるところに行った。

最初入浴と聞いて日本式の入浴を思っていたが期待はずれで、被服は別途に蒸される、人体は小さな桶に八分目のお湯で体をなでながら垢を落とし、すすげる。

程度の入浴であった。それでも入らないよりましで、さっぱりとした気分だった。

被服も一応は虱も動きが止まったが、いつまた動き出し、パチンパチンという音がどこことなく聞こえてくる。

3 身体検査

身体検査も二カ月に一回くらいあり、女性軍医であった。

検査要領は極めて簡単初歩的なもので次のようであった。

- (1) 全体的な容貌を検分
- (2) お尻の皮を引張ってみる
- (3) 要検診者だけ検診する

で一般的には(2)が大部分であった。要はお尻の皮に肉がついておればOKで、ほとんどがOKとなっている。こうした身体検査により作業区分が指定されるが、作業区分は次のようであった。

- (1) 一、二級は健康者(重労働に服する)

・ 森林伐採、搬出 ・ 製材(枕木、板造) ・ 家

屋建築 ・ 道路工事 ・ 鉄道工事 ・ 炭鉱 ・ 草刈

(2) 三級はやせた者(軽作業に服する)

・ 炊事の釜炊き、水汲み ・ 補助勤務
・ 浴場勤務 ・ 便所掃除

(3) 病弱者(作業免除)

(4) 入院者

ここでユーモアを一つ。女の軍医は我々に対し、検査をしながら、ヤポンスキー・マーリンキ・ボルショイハラシヨ(日本人は小さい、大きいがよろしい)とからかっていたが、我々はそんなことより腹を満たすのが精いっぱいである。

4 食糧拝借

伐採班には積材運搬の橇班もあって小馬が橇を引く。馬の糧秣は麦である。だれか麦に目をつけ馬屋の不寝番に麦を拝借し、煮たり焼いたりで食べていた。後程便づまりとなり、大変大変、血便を出す者もいたが、幸か不幸か大事に至らずに内々で事が済み不幸中の幸いであった。

収容所の移動(ハバロフスク)

厳寒期が過ぎて湿地帯に水が湧くようになると伐採は終わりでラーゲルの移動である。

昭和二十一年五月ハバロフスクに移動、ここは第二十一収容所で、物すごく大きい収容所だった。

1 収容所の構造

収容所の一つの建物は、幅五メートル、長さ五十メートル、高さ五メートルくらいで、中央に通路があって、左右二段式の寝床上下となり、周囲は土で埋めてあり、暖をとると上は熱し下は冷えてくる。

周囲は鉄線が二重に張られ四方に見張所で監視兵の銃口があって、灯はこうこうと照らされて警戒は万全である。収容人員は千人くらいはいたと思う。

ソ連の詰所と炊事場は別棟となっていた。

2 作業内容

ハバロフスクの作業は主として建築作業で、中でも冬季の穴掘り(幅一メートル、深さ四メートルである)、四メートル中一メートル半は凍結しており、鶴嘴を打ち込む度に火花を発し容易に作業ははかどらない。鶴嘴は日本軍の工兵隊が使ったと思われる両方尖ったも

の。一日の作業が終わると必ず鶴嘴を修理する鍛冶場に持ち寄り、明日の準備をせねばならない。

一メートル半を過ぎるとやわらかな土となり大助かりで、四メートル掘ると二十メートルくらいの丸太が穴にはめられ建築の主柱となるらしい。埋め戻す際、砂と土と雪でやった。その後どうなっているか知る由もない。

どこでも建築には大工と左官が必要であるように、ソ連でも大工、左官を求めている。本職の者、未経験者を問わず、志望する者、研修を希望する者は優先して採用され、大工、左官の下回りをさせられた。これらの作業は一般の雑役の作業より軽作業で志願者も多く、後々では本職に変わらぬ技術を身に付ける者もいた。これらは、ひいてはソ連側もノルマが上がり、優良作業班となって優遇されていたと思う。

建築は主に軍民の官舎が多かった。ハバロフスクと言えば極東の重要地点で、これからは極東首都司令部にも価値するものとも思われ、建築熱は夥しいものがあった。

3 処遇

ハバロフスクの食に対する待遇も悪く腹のすくことは同じだった。一五〇グラムの黒パンと中身のないスープが飯盒に三分の一度度であった。昼も同様で、多くの者は昼食を朝食時に食べ、昼は野草と掘り残しの馬鈴薯を蒸して食べるのが普通だった。

空になった飯盒を腰にぶらさげ重労働への一日であることは、あまりにもあわれであり、悲惨という外に言う言葉がない。

したがって、昼食時はまず畑の馬鈴薯掘り、それにヨモギ、セリ、ガマ、タンポポを混入、固型塩で昼食代用をしたものだった。でもよく体がもったものと思うが、実は私はセリの中毒にかかり下痢発熱した経験もあった。

おかしいことに黒パンには中の軟らかいところと側の固いところとがあり、だれもが固い箇所を欲しかったので、生活の知恵とでもいうべきか、秤を作り、平均に配分することとなり、平穩であったこともある。

ソ連人との物々交換もこの頃になると時計、万年筆、

指輪などの高級品もなく、自衛策により体力保持を考えねばならない。そこで前述したような畑の馬鈴薯掘りが始まった。補助食としてはもってこいの品であり、相当遠くまで掘りに行っても警戒兵はあまりやかましく言わなくなっていた。

4 第二の作業場

一通りの建築作業を終わり、市内パン上場の運搬作業に駆り出された。この作業場は我々にとっては好都合な作業所で、たまにはパンにありつけるし、パン粉も相当場外に持ち出すことができ、腹の足しになった。作業終わりになると頭の上から足の先までどこかにパン粉の袋があった。最終には靴の中、防寒外套の内側に紐の袋をたらし、検査の際交互に袋をあやつりながら持ち出したものだった。

袋が破れておれば幸いだが、破れていないときは無理に穴を開け、粉を洩らしながら運搬し、最後にこれを掃き集めて持ち帰った。このほか冬期は船舶のサビ落としもあって、船舶の下からふき上がる寒風は今でもぞっとするくらいであった。

5 入院

昭和二十三年の冬、身体検査の結果、急性肺炎のため入院することとなった。

当時大きな呼吸は全然できない。小さな呼吸でも時々胸を刺されるような痛みがあって、はてはこれまでかとも思った。ソ側の軍医により注射を数本されたが、これがアメリカ製のペニシリンだったことが分かり感謝している。半月くらいで退院し、軽作業組に配置され、炊事の釜炊きをする事となった。

ここで私が十五歳のとき、郷里の紙会社で経験散見したボイラーの罐焚きのことが大いに役立ち、ハラショラボーターとなって、外の炊事当番からかわいがられた。

それは火夫の石炭の投入方法により火熱を上げ、早く正確に炊事作業ができることだった。

炊事場という所は日本も同様、何かにつけて食に便利なものになっている。私も量的、質的に健康を保持するため便宜を与えてもらっていた。

人生のドラマのようなもので、十五歳のボイラーの

出来事がシベリアの抑留期に役立って、健康を保持し帰郷することができたなんて、いつ、どこで、何事にも見聞を広める必要性のあることを教えられ、うれしかった。

6 取調べとダモイ

前歴の関係もあって当所に来てからちよいちよい取調べがあるようになった。

取調べは夜間で、独房室で相手は一人で、在満中の任務、上官の氏名任務が主な内容だったと思うが、正直に回答しなかったので、ソ連式の留置場にも何べんか入れられ、夜中に収容所に帰り、明日は同作業と、体を休める時間もないほどだった。

独房は身動きもできず直立不動で入っていた。これが一つの仕置きであったかもしれない。

昭和二十一年ごろよりダモイが始まった。ダモイ列車を見たこともあったが、私には順番は回ってこない。私のダモイは昭和二十五年四月であるが、それまでにダモイ組に入り、ナホトカまで輸送されながら取調べその他で収容所帰りであった。こんなことが三度あ

り、残念でたまらないものだった。今そのことを思うと一つの取調べ上の手段、方法ではなかったかと思われる。

7 郷里との音信

私が世帯を持ったのは昭和十九年六月であり、斉斉哈爾で同居していた。家内たちは八月十日他の家族と憲兵一人に付き添われ哈爾濱まで下った。その後の消息は不明であった。

昭和二十二年四月二十九日（天長節）妻から一通のハガキを受け取った。二十一年十月無事郷里に帰ったとのこと、うれしかった。勇気百倍必ず帰らねばとファイトも湧いた。その妻に米子まで出迎えられ、昭和二十五年四月二十八日郷里の土を踏んだのだった。

8 民主化教育

民主化教育は当地に来てから一年くらいしてから逐次やってきた。やる本人も決して心あってやっているとも思わない。ただその場のつくろいと早くダモイ組となるための手段だろうと推測もしていたので、かえって同情的な目で見てはいた。

我々に直接やってくるとか他を介してやるということもない以上、取り合わないこととしていた。時々所内の広場や室内で新聞の切り抜きによるスターリン称賛、民主歌を歌い、アジを飛ばしながら解散する程度だった。民主新聞も時々配布されたが、便所用に使われた程度だった。

9 便所

便所としてあるのは大使所のみで、小便は一定の箇所、穴が掘ってあり、その中へ中へと自由である。夏期はそれでよいが、冬期はそれが高く広くなってくる。鶴嘴の出番で簡単だ。

問題は大使所である。大使所は一定の箇所に三畳の横穴（幅五十センチ・長さ三メートルくらい）を掘り、その上に板を渡してある、したがって前の人のお尻を眺めながらのたれ流し。冬期は大変、これらがすべて凍り、棒のようになってお尻に当たると格好となる。その際は各班からの使役により棒大便の粉碎作戦。防寒外套に身をかため、鶴嘴による粉碎、固まったとばかりが外套は勿論、たまには顔にもかかってくる。

凍っているから差し当たって何でもないが、終わって所内の暖房に当たると臭気が鼻をつく。上段にいるものには特に臭気がひどいらしい。

でもだれもなんとも言わない。お互いのことだから、なんと言っても厳寒地特有の特種だ。

舞鶴上陸、帰郷

昭和二十五年四月二十二日、引揚船「興安丸」を前にして「星野好夫」と呼ばれた。今回はいよいよ帰郷できると自信を深めたものだった。

それでも興安丸に乗るまでは気が許せない。ほんとうに祈るような気持ちで乗船までを待っていた。だんだんと隊伍の列も船に近づいてくる。引き戻された過去三回のこともあって、隠れるような気持ちで早く早くと気があせる。少しずつではあるが船に近づいている。そのうちタラップに足がかかり、駆け上がりたような気持ち、人を押しのけてこのタラップを駆け上りたい。目をつむりながら考え、興安丸上の人となることができた。最後はタラップを足で蹴って乗船したことが生々しく浮かんでくる。待ち遠しかった帰郷、

これで大丈夫と思うとその後は何をしていたか、記憶にさだかでない。ただ若造が民主化と称して歌を歌っていたことは覚えている。

大陸に渡り十三年ぶりに郷里の土が踏める、当時三十五歳であった。帰れば妻も待っているであろうが、母は健在のはず(昭和二十五年二月四日他界していた)。興安丸の三日間はあまり記憶になく、ただ広々とした日本海を眺めながら、ひたすら舞鶴に到着を待つのみであったのではないかと思われる。

三日経った四月二十五日の朝、舞鶴港が見えてきた。汽笛の合図にだんだんと近づく舞鶴港(過去見たことがない)。

さすが、要港とあって島々に囲まれた軍港である。開戦期、若い勇士がこの港を最後に不帰の身となって出港されたことだろうと思ってもみた。

近づく軍港の四月下旬である。若葉青葉萌えるような春である。十三年ぶりの日本の春である。なんと美しい平和を象徴するようなこの景色、ただただ感激の極みであった。ただ、狭い日本、つき当たるような日

本のイメージは今も脳裏を離れない。ひたいに当たるような岸壁、狭い日本である現実を見つめなければならぬ。

というのも、私が十三年ぶりの帰郷であるし、過去大陸、原野、シベリアと、広漠とした地のみに生存していたこともあって、舞鶴の岸壁がいやというほど狭苦しく感ぜられたものだった。

かくして三日間諸手続を経て四月二十五日舞鶴出発、二十八日郷里に帰ることができた。

帰郷してみると早速働くことが急務である、幸い家内がミシンの内職技術もあり、私は鉾山のトロコ押しをしながら六畳一間の借家生活であった。その上、私がシベリア帰りと憲兵で公職追放のため元の職に復職できず、三年有半民間会社に勤め、二十八年八月、郵便局に復職することができた。

最終になって、シベリア生活が基で年金関係で三年有半在籍年数加算に憂き目を見たが、幸い健康で若干の年金をもらいながら畑作に精を出している現況である。

【執筆者の紹介】

現 住 所 島根県大原郡大東町下阿用四六五―二
 出 生 地 島根県大原郡木次町木次二二二
 生年月日 大正五年三月十三日生
 経 歴

昭和五年三月二十五日 木次町尋常高等小学校卒業
 昭和五年四月一日 木次製紙株式会社入社
 昭和七年五月三十一日 木次製紙株式会社退社
 昭和七年六月一日 広島通信講習所入所
 昭和八年五月三十一日 広島通信講習所卒業
 昭和八年六月一日 木次郵便局勤務
 昭和十二年二月二十八日 木次郵便局退職
 昭和十二年三月九日 新京電信第三連隊入隊
 昭和十三年三月 関東軍憲兵教習隊入隊
 昭和十三年九月 満州国齊齊哈爾憲兵隊勤務
 昭和二十年八月十五日 終戦
 昭和二十年八月十六日 武装解除
 昭和二十年十一月 シベリア抑留
 昭和二十五年四月二十五日 舞鶴上陸帰郷

昭和二十五年四月 民間会社勤務
 昭和二十八年七月 民間会社退職
 昭和二十八年八月 木次郵便局ほか加茂・大東局勤務
 昭和四十九年八月 右郵便局退職
 昭和五十年四月 大東町阿用公民館勤務
 平成三年三月 大東町阿用公民館退職
 昭和六十三年三月 全抑協島根県連合会大東町支部事務局長
 平成八年九月 右任職中
 星野好夫さんの人となりは極めて責任感の強い方でした。シベリアより引き揚げ、長らく勤められた郵便局に在職中は簡易保険の勧誘等その精勤ぶりが高く評価され、局長から厚い信任を得ておられました。定年退職後は阿用公民館館長として公民館の活動と発展に大いに寄与され、地域の皆様の信望をあつめられ、平成三年三月惜しまれつつ退かれました。また、全抑協島根県連合会大東町支部の事務局長を引き継がれてからは、老骨にむち打って献身的に奉仕され、現在大東

町支部にはなくてはならない貴重な人材であります。

(島根県 星野 誠一)

シベリア抑留記

岡山県 妹尾 正一郎

入ソ

満州国遼陽で武装解除、連隊旗も奉焼して、海城に集合し、ここで捕虜編成がなされた。一千名(入ソ後五百名が加った)で第五大隊となった。そのころは、みんな帰国できるものと信じていた。奉天(瀋陽)、韓国經由で内地に帰るうわさが盛んであった。捕虜を乗せた列車は、奉天を通過し北へ北へと進み、ついにハルビンに到着した。

ここで下車し、四キロほど歩いて、入浴と衣服の滅菌をした(帰国のためだと言ったが、実は入ソのためであった)。ハルビンで一週間ほど列車の中で生活をした。この間に、ハルビンからシベリア鉄道のカリム

スカヤまで線路を広めた(同じ広軌でも満鉄は一・四三五メートル、シベリア鉄道は一・五二四メートルである)。

列車は十月二十日、大興安嶺の山越えであった。澄みきった秋空の月の光が、私たちの顔を青白く照らし出していたのをはっきりと覚えている。

列車は山の端を静かに進み感無量であった。ソ連の指揮官は、カリムスカヤからウラジオストクへ行く方が、鉄道が空いているから速いと言った。今までの言動から信用できなかったが、帰国したい一念から一縷の望みを託していた。カリムスカヤに着いたのは夜であった。列車よ、東に走ってくれ、東に行けば帰国できるかもしれない、夜のシベリア鉄道を走りながら額を床につけ神に祈った。淡い期待も無残に打ち碎かれ、列車は西へ西へと走り続け、夜が明けたら、なんと一面雪景色であった。

ゲネラルパーティ

列車の着いた所はチタ州ヤブロンノワヤであった。ソ連における捕虜は内務省の管轄する一般収容所と、